



図3 文玩核桃（賞玩クルミ）

店主の姿を作ろうと思いついた。そこで、木蓮の花芽を店主の体とし、更にセミの抜け殻の鼻部分を頭とし、セミの抜け殻の四肢をそれぞれ両手と両足とし、最後に白皮でくっつけた。このようにして、最初の“毛猴”は産まれた。

三. 結びにかえて

今回、“毛猴”についての現地調査を通して、利益の少ない“非物質文化遺産”に対する保護の必要性を感じている。それは“毛猴”が大人気の“骨董”や“文玩核桃（賞玩クルミ）”（図3参照）などと比べて、価値が上がらなると見なされているからである。従って、現在“毛猴”に興味を持つ人は非常に少なく、この工芸ができる人も極めて少ない。今回訪問した首都博物館、西城区非物質文化遺産展示センター、東城区非物質文化遺産展示センター、天津民俗博物館および北京地壇民俗文化節（祭り）の五ヶ所では、“毛猴”の作品は他の展示品よりもはるかに少なかった。また、“毛猴蕭”の伝承者の蕭掌柜氏に「今“毛猴”の作り方を学びたい人は多いですか。」と質問したとき、「非常に少ない。うちの家族さえやる気がない。」との答えが返ってきた。この現状に基づき、“毛猴”のような利益の上昇しない“非物質文化遺産”を如何にして継承しつづけるのかという問題はとても深刻であると思う。このような課題が非文字資料研究の今後の研究テーマのひとつになることを望んでいる。

カナダ日系人の移民史 —第二次世界大戦まで



姚 琼

（歴史民俗資料学研究所 博士後期課程）

この度、2012年度神奈川大学非文字資料研究センターの派遣研究員として、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科へ訪問し、2012年11月1日から20日まで、「カナダ日系人の移民史—第二次世界大戦まで」というテーマで研究を行った。その間にブリティッシュ・コロンビア大学アジア学科の許南麟教授とチューターのニコレット・リーさん、ホームステイの家族の方に大変お世話になり、この場を借りて感謝の気持ちを申し上げます。

私は今回の研究テーマについて、主にブリティッシュ・コロンビア大学図書館とバンクーバー市立図書館に所蔵する資料を探し求めた。

（一）初期のカナダ日系人

カナダは、三つの民族的要素を持ちながら建国された。第一は、北からアラスカを経て定住した先住民族の「カナダ・インディアン」である。第二は、東から大西洋を

経て移ってきたフランス人たちである。第三は、南からアメリカ合衆国より避難してきたイギリス人たちである。そして、フランス人、イギリス人の後を追うかのように、ドイツ、イタリア、ウクライナ、オランダなどの



UBC キャンパス



民族集団が大西洋を渡り、それぞれ定住した。¹ その頃、太平洋側から中国人を主力としたアジア人が、海を渡ってカナダに移住し、日本人移民がカナダに上陸したのは1877年であった。

カナダの日本人移民の第一人者と言える人は永野という姓の人で、1853年11月、長崎県に生まれた。1877年3月、当時、太平洋航路をとる船が長崎に停泊しており、永野は船長に、船で働くことを条件に乗船させてほしいと志願し、許可された。

永野氏がカナダに上陸してから、およそ20年の間に、日本人移民数は出稼ぎに行く単身の男子集団を主として、続々と増えてきた。19世紀末から20世紀初頭は、日本人移民は男子が圧倒的に多かった。原因は極めて単純で、男たちは日本国内で仕事が見つからず、たとえ職を得たとしても、低賃金で家族を養うこともできないからであった。カナダに出稼ぎにきた日本人は、未婚の男性たちが多かったが、既婚・未婚を問わず男たちは単身でカナダを目指したのである。その男たちは、親に仕送りをし、妻子を飢えさせないために、数年間の予定で、ブリティッシュ・コロンビアに赴いたのである。

(二) 中期のカナダ日系人

20世紀に入る頃から、カナダへの日本人移民は急速に増えていく。1907年に、東京移民会社は約1500人の日本人をカナダへ送った。そのほとんどは、バンクーバーに行くこととなった。カナダ日系移民について著書のある末永氏²によると、この時期の日本人移民は主にブリティッシュ・コロンビア州の3箇所に勤めていた。

¹ 吉田忠雄『カナダ日系人移民の軌跡』(人間の科学社 2003年)
² 末永國紀 著書:『日系カナダ移民の社会史—太平洋を渡った近江商人の末裔たち』(ミネルヴァ書房 2010年) など

それらは、カナダ太平洋鉄道会社、ブリティッシュ・コロンビア州内の石炭鉱山とウェリングトン石炭会社である。バンクーバーを中心として、ブリティッシュ・コロンビア州の日本人移民は、こうして徐々に増えてきた。

第二次世界大戦に入ると、カナダ日系人の生活が大きく変わる。アン・ゴーマー・スナハラ (Ann Gomer Sunahara) が書いた『The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians During the Second World War』(Toronto, 1981) の中で、戦争中のカナダ日系人が遭った拘留、強制移動や監視付き生活を詳しく述べている。

戦時中のカナダ日系人の生活状況についての研究著作は、アン・ゴーマー・スナハラやケン・アダチ (Ken Adachi) 『The Enemy that never was; A History of the Japanese Canadians』(Toronto, 1976) があり、詳しく非常時期のカナダに滞在する日系人の活動を述べている。また、日本語で公開されたものでは、新保満氏の『石をもて追われるごとく—日系カナダ人社会史』(大陸時報社、トロント、1975年刊)、『カナダ日本人移民物語』(築地書館、1986年刊) が詳しい。さらに近年、日系人の間で、自分の体験記録をまとめたものが数多く公開されている。

1989年6月、オタワにあるカナダ政府は、カナダ全土に以前から住む日系人に、証書のような手紙を送った。それは、カナダの首相が公式にカナダ日系人に謝罪した公文書であった。たった一通の証書だが、カナダ日系人にとっては、特別な意義を持っている。戦時に屈辱を受けた日系人にとっては、何よりの慰めであったことだろう。

日欧における住宅用台所の近代化過程に関する研究

須崎 文代
(工学研究科建築学専攻 博士後期課程)



近現代の家庭生活は、産業革命以降、グローバルに展開した近代化の影響を受けて大きく変容した。なかでも台所は、住宅内の他室に比べて、近代化過程のなかでも最も機能が多様化し、設えも大きく変化してきたのである。こうした台所の近代化に関する先行研究は、主として現象的な観察の中での議論に限られており、変容の要因や

社会的影響関係などの動向については残念ながら殆ど明らかにされていない。そこで、私は住宅用台所の近代化過程を明らかにする研究に取り組んでいる。現在、戦前期の台所の近代化には、建築関係者に限らず家政学関係者が深く関係したことに注目し、家政書から読み取れる台所改良論を中心として、衛生論や能率論などの理論が